

## 資料

# 母親の就業有無及び就業時間が 児童生徒の食意識と生活習慣に及ぼす影響

菅 綾<sup>\*1</sup>、鈴木 志保子<sup>\*2</sup>、飛松 佳子<sup>\*3</sup>、瀬 安希子<sup>\*4</sup>、田中 延子<sup>\*5</sup><sup>\*1</sup>松山市立姫山小学校、<sup>\*2</sup>神奈川県立保健福祉大学、<sup>\*3</sup>鹿児島県立鹿児島盲学校、<sup>\*4</sup>兵庫県立芦屋特別支援学校、<sup>\*5</sup>文部科学省

【連絡責任者】菅 綾 松山市立姫山小学校

TEL : 089-924-1337(城北共同調理場) FAX : 089-927-0999 E-mail : kan-aya@esnet.ed.jp

## 緒言

社会環境の変化にともない「食」をめぐる状況も変化し、生活習慣における様々な乱れが問題とされ、望ましい食習慣の形成を図るため食育が推進されている。「食」をめぐる状況の変化に伴う様々な問題に対処していくため、2005年に「現在および将来にわたる健康で文化的な生活と豊かで活力のある社会の実現に寄与すること」等を目的として「食育基本法1」が公布された。

子どもの食生活の問題点としては、「孤食」や「個食」、食事のマナーの低下、嫌いなものを食べないとする子どもの増加、朝食欠食、肥満などが挙げられ<sup>[2]</sup> これらを改善するため家庭、学校、地域等の様々な場において「食育」が推進されているところである。子どもたちへの食育は、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるほか、子どもの頃に身に付いた食習慣を大人になって改めることが困難であることから、きわめて重要である。

小学校・中学校の児童生徒にとって、食生活の多くの場は家庭であり、90%以上の家庭で食事の管理は母親によって行われている<sup>[3][4]</sup> 母親の食意識や食行動パターンが子どもの食生活へ影響を与えること<sup>[5-7]</sup> や、児童の健康状態の不調と母親の健康状態との関連<sup>[8]</sup> 母親の生活リズムと子どもの生活リズムの関連<sup>[9,10]</sup> に関する報告など、母親と子どもに焦点を当てた研究からも、母親の食行動、食意識は子どもの食行動、食物摂取の状況、食意識、健康状態面へ大きな影響を与えている。

一方で、平成16年度中央審議会「食に関する指導体制の整備について(答申)[11]」では、食に関する指導の充実の必要性の背景として、核家族化の進展、共働きの増加等が挙げられ、平成18年度版食育白書では、

食育推進にいたる背景として、「女性雇用者の増加等社会情勢の変化の中で、調理や食事の簡便化志向が高まっている<sup>[2]</sup>」と食の変化が示されているように、小中学生の食に関して大きな影響を与えるとされる母親の就業率は増加傾向にある<sup>[12,13]</sup> そして、「子どもとの会話の量は、専業主婦と有職者の間には開きがある。家族みんなで食事をしたり、子どもと一緒に遊んだりといった母親の行動の量は、専業主婦のほうが多い。」等の子育てや子どもの生活を母親の就業状況により比較を行った調査報告<sup>[14]</sup> にもみられる。

そこで、本検討は、母親の就業の有無及び就業時間によって、児童生徒の生活習慣・食意識等に違いがあるのか、また、母親自身の食意識等への影響があるのかを検証することを目的とした。

## 方法

本検討は(独)日本スポーツ振興センターが実施した『平成19年度児童生徒の食事状況調査』<sup>[4]</sup>の結果を分析した。調査項目と内容は、表1に示した。調査用紙は、(独)日本スポーツ振興センターが学校に対して配布し、回収した。記入は、無記名とし、児童生徒が学校で行い、保護者は家庭で行った。調査対象者は、47都道府県から選定した完全給食を実施している公立学校の小学校5年生、中学校2年生(有効回収数6,015名)及びその児童生徒のふだんの食事を用意している保護者(有効回収数5,615名)である。保護者の内訳は、母親95.6%、父親2.6%、祖母1.5%、祖父0.1%、その他0.3%であった。

今回の検討の対象者は、保護者の95.6%を占めた母親とその児童生徒のみを抽出し(有効回答4,676組)母親の就業状況から「家事専業」群(989組)

表1 調査項目と内容

対象	項目	内容
児童生徒	食習慣・生活習慣の実態	朝食・おやつ・夜食の喫食状況、共食状況、睡眠時間、朝のめざめ
	食意識	噛む、お菓子のとりかた、好き嫌い
保護者	食生活の実態	朝食の喫食状況、共食状況
	食意識	献立作成時に気を付けること、子どもの生活習慣で心配なこと

21.2%)、「有職(週40時間未満)」群(1,994組42.6%)、「有職(週40時間以上)」群(1,693組36.2%)の3群に分けた。(以下、「家事専業」群を「S」群、「有職(週40時間未満)」群を「Y40未満」群、「有職(週40時間以上)」群を「Y40以上」群とする。)有職である母親については、就業形態の常勤とパートタイムの区分けを行うため、40時間の就業時間で2群に分けた。

なお、著者は『平成19年度児童生徒の食事状況調査』[4]の報告書の活用を図る臨時委員の委嘱を受け、研究に際して、研究の目的でデータを活用・分析し、発表・論文を作成することについて(独)日本スポーツ振興センターより承諾を得た。また、データは、(独)日本スポーツ振興センターより、個人情報や個人を特定する情報はすべて排除した形式で受け取った。

統計処理の方法は、児童生徒及び母親から得られ

た各項目の結果は、母親を「S」「Y40未満」「Y40以上」の3群に分け、クロス集計及び $\chi^2$ 検定を実施した。有意水準は、 $p < 0.05$ を有意差ありとした。 $\chi^2$ 検定の結果、有意差が認められた項目については調整済み標準化残差の分析を実施した。統計解析は、Microsoft Office Excel 2007にてExcel関数式を用いて行った。

## 結果

小学校・中学校および児童生徒全体の食習慣・生活習慣につて3群における人数とその割合、 $\chi^2$ 検定の結果を表2に示した。児童生徒の食習慣・生活習慣では、小学校の睡眠時間を除き、3群間における有意差は認められなかった。

児童生徒の朝食摂取状況は、約90%の児童生徒が、必ず毎日朝食を食べる習慣があった( $p=0.202$ )、

表2 食習慣・生活習慣(児童生徒)

	全体 (n=4676)				小学校 (n=2330)				中学校 (n=2346)			
	S (n=989)	Y40 未満 (n=1994)	Y40 以上 (n=1693)	$p$ 値	S (n=560)	Y40 未満 (n=986)	Y40 以上 (n=784)	$p$ 値	S (n=429)	Y40 未満 (n=1008)	Y40 以上 (n=909)	$p$ 値
<b>朝食摂取</b>												
必ず毎日食べる	902(91.2)	1806(90.5)	1514(89.4)	0.202	516(92.1)	912(92.5)	716(91.3)	0.257	386(90.0)	894(88.7)	798(87.8)	0.657
週に2~3日食べない	58(5.9)	143(7.2)	137(8.1)		31(5.5)	64(6.5)	57(7.3)		27(6.3)	79(7.8)	80(8.8)	
週に4~5日食べない	6(0.6)	15(0.8)	16(1.0)		2(0.4)	4(0.4)	3(0.4)		4(0.9)	11(1.1)	13(1.4)	
ほとんど食べない	23(2.3)	30(1.5)	26(1.5)		11(2.0)	6(0.6)	8(1.0)		12(2.8)	24(2.4)	18(2.0)	
<b>おやつを食べる頻度</b>												
ほとんど毎日	295(29.9)	585(29.3)	460(27.2)	0.075	186(33.2)	321(32.6)	234(29.9)	0.461	109(25.4)	264(26.2)	226(24.9)	0.299
週に4~5日食べる	206(20.8)	419(21.0)	310(18.3)		122(21.8)	221(22.4)	163(20.8)		84(19.6)	198(19.6)	147(16.2)	
週に2~3日食べる	289(29.2)	588(29.5)	536(31.6)		167(29.8)	284(28.8)	238(30.3)		122(28.4)	304(30.2)	298(32.8)	
ほとんど食べない	199(20.1)	402(20.2)	387(22.9)		85(15.2)	160(16.2)	149(19.0)		114(26.6)	242(24.0)	238(26.1)	
<b>夜食を食べる頻度</b>												
ほとんど毎日	128(12.9)	279(14.0)	218(12.9)	0.081	76(13.6)	132(13.4)	112(14.3)	0.352	52(12.1)	147(14.6)	106(11.7)	0.106
週に4~5日食べる	94(9.5)	214(10.7)	217(12.8)		54(9.6)	106(10.7)	92(11.7)		40(9.3)	108(10.7)	125(13.8)	
週に2~3日食べる	238(24.1)	513(25.7)	425(25.1)		115(20.5)	243(24.7)	185(23.6)		123(28.7)	270(26.8)	240(26.4)	
ほとんど食べない	529(53.5)	988(49.6)	833(49.2)		315(56.3)	505(51.2)	395(50.4)		214(49.9)	483(47.9)	438(48.1)	
<b>起きた時の目ざめ</b>												
すっきり目がさめた	210(21.2)	394(19.8)	329(19.4)	0.765	155(27.7)	251(25.5)	192(24.5)	0.309	55(12.8)	143(14.2)	137(15.1)	0.835
少し眠かった	549(55.5)	1137(57.0)	980(57.9)		300(53.6)	570(57.8)	466(59.4)		249(58.1)	567(56.2)	514(56.5)	
眠くて起きられない	230(23.3)	463(23.2)	384(22.7)		105(18.7)	165(16.7)	126(16.1)		125(29.1)	298(29.6)	258(28.4)	
<b>睡眠時間</b>												
6時間未満	18(1.8)	46(2.3)	33(1.9)	<0.001	2(0.4)	3(0.3)	1(0.1)	0.006	16(3.7)	43(4.3)	32(3.5)	0.141
6時間以上8時間未満	310(31.3)	765(38.4)	702(41.5)		65(11.6)	125(12.7)	140(17.9)		245(57.1)	640(63.5)	562(61.8)	
8時間以上	661(66.9)	1183(59.3)	958(56.6)		493(88.0)	858(87.0)	643(82.0)		168(39.2)	325(32.2)	315(34.7)	

人数(%)

$\chi^2$ 検定で有意差が認められた項目は調整済み標準化残差の分析を実施(       $P < 0.05$        $P < 0.01$  )

昼食から夕食までの間におやつを食べる頻度は、3群ともに約30%の児童生徒に毎日おやつを食べる習慣があった( $p=0.075$ )。

夕食から就寝までの間に夜食を食べる頻度は、「食べない」の回答が、S群529名(53.5%)、Y40未満群988名(49.6%)、Y40以上群833名(49.2%)であり( $p=0.081$ )、約50%の児童生徒に、夜食を食べる習慣があった。

今朝起きたときの目ざめの状況については、3群間に有意差は認められなかった( $p=0.765$ )。

睡眠時間は、小学校・中学校別の比較で、小学校のみ3群間において有意差が認められた( $p=0.006$ )。調整済み標準化残差分析の結果から、6時間未満の睡眠時間は、3群間による差は生じないが、6時間

以上8時間未満の睡眠時間は、S群11.6%は少なく、Y40以上群17.9%が多いことが認められた。また、8時間以上の睡眠時間は、Y40以上群82.0%が他の2群に比較して少なかった。中学校は、3群間に有意差は認められなかった( $p=0.141$ )。

児童生徒の食意識(表3)では、「食事はゆっくりよくかんで食べる」( $p=0.849$ )、「お菓子やスナック菓子を食べすぎない」( $p=0.201$ )、「好き嫌いをしない」( $p=0.536$ )のすべての項目において3群間における有意差は認められなかった。

食事の共食状況について、児童生徒自身の回答では、朝食は3群間の比較において有意差は認められなかった( $p=0.078$ 、図1)が、夕食では3群間に有意差

表3 食意識(児童生徒)

	全体(n=4676)				小学校(n=2330)				中学校(n=2346)			
	S (n=989)	Y40未満 (n=1994)	Y40以上 (n=1693)	p値	S (n=560)	Y40未満 (n=986)	Y40以上 (n=784)	p値	S (n=429)	Y40未満 (n=1008)	Y40以上 (n=909)	p値
ゆっくりよくかむ												
はい	388(39.2)	762(38.2)	628(37.1)		254(45.4)	455(46.1)	363(46.3)		134(31.2)	307(30.5)	265(29.2)	
いいえ	303(30.7)	611(30.7)	530(31.3)	0.849	138(24.6)	259(26.3)	197(25.1)	0.872	165(38.5)	352(34.9)	333(36.6)	0.493
わからない	298(30.1)	621(31.1)	535(31.6)		168(30.0)	272(27.6)	224(28.6)		130(30.3)	349(34.6)	311(34.2)	
お菓子やスナック菓子を食べすぎない												
はい	579(58.5)	1127(56.5)	948(56.0)		344(61.4)	596(60.4)	487(62.1)		235(54.8)	531(52.6)	461(50.7)	
いいえ	249(25.2)	560(28.1)	498(29.4)	0.201	131(23.4)	256(26.0)	195(24.9)	0.679	118(27.5)	304(30.2)	303(33.3)	0.270
わからない	161(16.3)	307(15.4)	247(14.6)		85(15.2)	134(13.6)	102(13.0)		76(17.7)	173(17.2)	145(16.0)	
好き嫌いをしない												
はい	525(53.1)	1022(51.3)	848(50.1)		296(52.9)	529(53.6)	405(51.7)		229(53.4)	493(48.9)	443(48.7)	
いいえ	338(34.2)	718(36.0)	635(37.5)	0.536	191(34.1)	352(35.7)	295(37.6)	0.464	147(34.3)	366(36.3)	340(37.4)	0.471
わからない	126(12.7)	254(12.7)	210(12.4)		73(13.0)	105(10.7)	84(10.7)		53(12.3)	149(14.8)	126(13.9)	

人数(%)

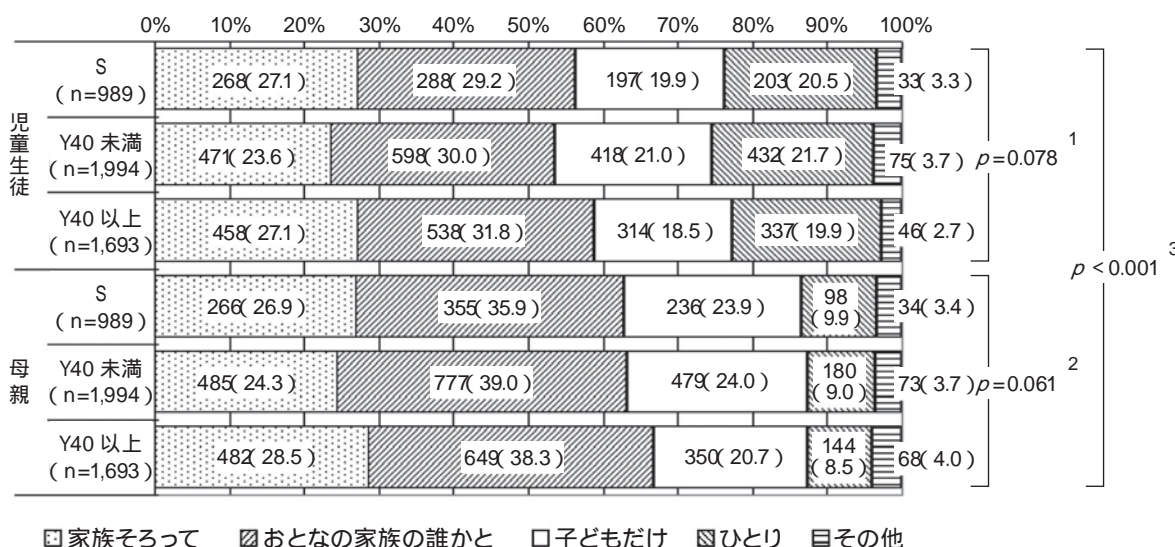


図1 朝食の共食状況

グラフの数値は人数、( )内は%を示す  
 S: 家事専業群 Y40未満: 有職(週40時間未満)群 Y40以上: 有職(週40時間以上)群  
 1 児童生徒の回答による「S」「Y40未満」「Y40以上」の3群間での $\chi^2$ 検定  
 2 母親の回答による「S」「Y40未満」「Y40以上」の3群間での $\chi^2$ 検定  
 3 児童生徒および母親の6群間での $\chi^2$ 検定

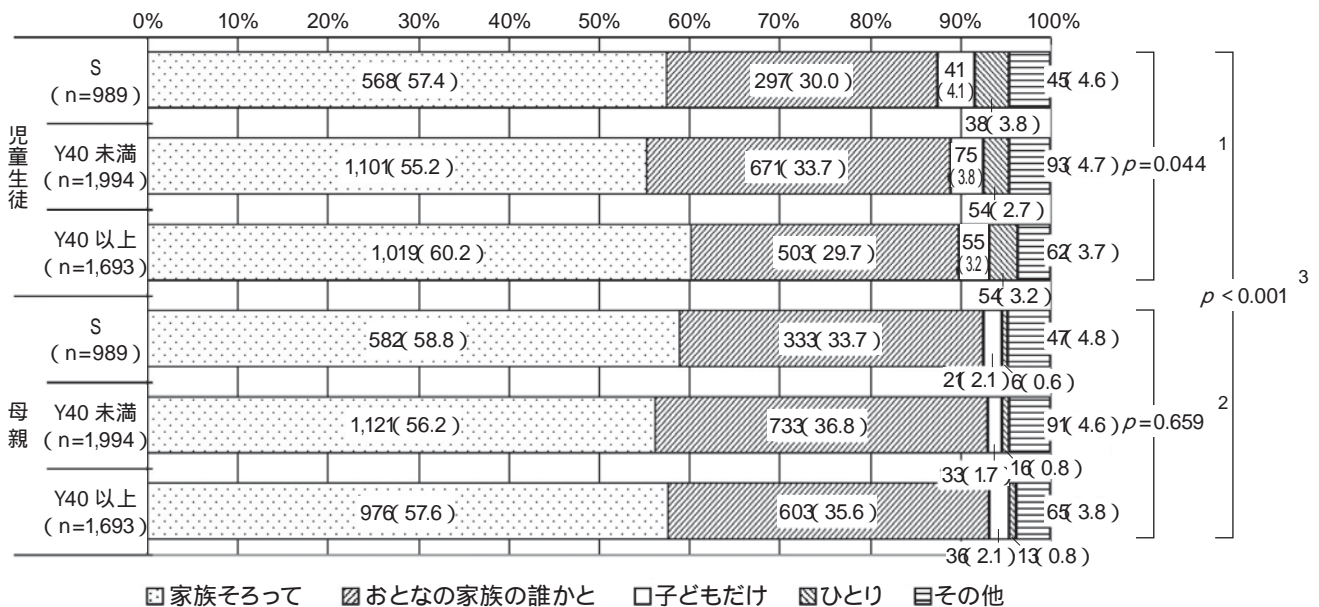


図2 夕食の共食状況

グラフの数値は人数、( )内は%を示す  
 S: 家事専業群 Y40 未満: 有職(週40時間未満)群 Y40 以上: 有職(週40時間以上)群  
 1 児童生徒の回答による「S」「Y40 未満」「Y40 以上」の3群間での $\chi^2$ 検定  
 2 母親の回答による「S」「Y40 未満」「Y40 以上」の3群間での $\chi^2$ 検定  
 3 児童生徒および母親の6群間での $\chi^2$ 検定

が認められた( $p=0.044$ ) (図2)。夕食を「家族そろって食べる」は、S群568名(57.4%)、Y40未満群1,101名(55.2%)、Y40以上群1,019名(60.2%)であり、調整済み標準化残差の分析から、Y40未満群が少なく、Y40以上群に多いことが認められた。夕食を「大人の家族の誰かと一緒に」は、Y40未満群671名(33.7%)で多かった。夕食を「ひとりで食べる」の回答は、調整済み標準化残差分析による有意差は認められなかった。

母親が回答した児童生徒の食事の共食状況(図1,2)では、朝食、夕食ともに3群間の比較において有意差は認められなかった。

また、朝食の共食状況について、母親からみた「子どもがいつもひとりで食事をする」の回答が、S群98名(9.9%)、Y40未満群180名(9.0%)、Y40以上群

144名(8.5%)であるのに対し、児童生徒の回答は、S群203名(20.5%)、Y40未満群432名(21.7%)、Y40以上群337名(19.9%)であり、母親からみた割合は3群ともに児童生徒自身が回答する割合に比べて著しく低かった。夕食についても同様であり、母親の「子どもがいつもひとりで食事をする」回答は、児童生徒の回答に比べて低かった。

母親の朝食摂取状況(表4)については、3群間の比較において有意差が認められ( $p=0.038$ )、Y40以上群の母親は、「必ず毎日食べる」1,453名(85.8%)の回答が他の2群にくらべて低く、欠食の割合が高い状況であった。

母親の食意識において、献立を決めるときに気を付けることは、3群ともに「栄養のバランス」が高い割合を占めた。「栄養のバランス」「調理

表4 朝食摂取状況(母親)

	全体 (n=4676)				小学校 (n=2330)				中学校 (n=2346)			
	S (n=989)	Y40 未満 (n=1994)	Y40 以上 (n=1693)	p値	S (n=560)	Y40 未満 (n=986)	Y40 以上 (n=784)	p値	S (n=429)	Y40 未満 (n=1008)	Y40 以上 (n=909)	p値
必ず毎日食べる	891(90.1)	1765(88.5)	1453(85.8)	0.038	501(89.5)	884(89.7)	672(85.7)	0.107	390(90.9)	881(87.4)	781(85.9)	0.131
週に2~3日食べない	66(6.7)	144(7.2)	147(8.7)		39(7.0)	54(5.5)	68(8.7)		27(6.3)	90(8.9)	79(8.7)	
週に4~5日食べない	4(0.4)	14(0.7)	16(0.9)		3(0.5)	7(0.7)	8(1.0)		1(0.2)	7(0.7)	8(0.9)	
ほとんど食べない	28(2.8)	71(3.6)	77(4.6)		17(3.0)	41(4.1)	36(4.6)		11(2.6)	30(3.0)	41(4.5)	

人数(%)

$\chi^2$ 検定で有意差が認められた項目は調整済み標準化残差の分析を実施(       $P < 0.05$        $P < 0.01$  )

の手間」「家計に見合うもの」の項目は、3群間の有意差が認められた(表5)。「栄養のバランス」は、S群で「はい」の回答が902名(91.2%)と多かった。「調理の手間」は、Y40以上群で「はい」1,362名(80.4%)が多かった。「家計に見合うもの」は、Y40未満群で「はい」1,698名(85.2%)が多かった。

子どもの生活習慣で心配なこと(表6)では、3群ともに「偏食」をあげる割合が高かった。「欠食」「睡眠不足」「家族団らん」「肥満」の項目は、3群間に有意差が認められた(欠食 $p=0.014$  睡眠不足 $p=0.021$  家族団らん $p<0.001$  肥満 $p=0.029$ )。3群間で差がみられた項目は、「家族団らん」であった( $p<0.001$ )。「家族団らん」は、「はい」の回答がS群128名(12.9%)、Y40未満群298名(14.9%)、Y40以上群354名(20.9%)であり、調整済み標準化残差分析の結果から、Y40以上群が心配している割合が最も高かった。

### 考 察

児童生徒の食習慣・生活習慣に関して、朝食摂取、おやつや夜食を食べる習慣、朝の目ざめについては、S群、Y40未満群、Y40以上群の3群間における有意差は認められず、母親の就業の有無や就業時間による児童生徒の生活習慣への影響の差はみられなかった。

表5 食事の献立を決めるときに気をつけること(母親)

	全体(n=4676)			p値
	S (n=989)	Y40未満 (n=1994)	Y40以上 (n=1693)	
栄養のバランス				
はい	902(91.2)	1752(87.9)	1480(87.4)	0.008
いいえ	87(8.8)	242(12.1)	213(12.6)	
調理の手間				
はい	674(68.1)	1524(76.4)	1362(80.4)	<0.001
いいえ	315(31.9)	470(23.6)	331(19.6)	
食品数				
はい	670(67.7)	1296(65.0)	1073(63.4)	0.073
いいえ	319(32.3)	698(35.0)	620(36.6)	
家計に見合うもの				
はい	820(82.9)	1698(85.2)	1379(81.5)	0.010
いいえ	169(17.1)	296(14.8)	314(18.5)	

人数(%)

$\chi^2$ 検定で有意差が認められた項目は調整済み標準化残差の分析を実施(■  $P<0.01$ )

小学校の睡眠時間において、3群間の比較で有意な関係が認められた。6時間未満の睡眠時間は、3群間に有意差はみられないが、8時間以上の十分な睡眠時間がある児童の割合は、母親が週40時間以上働いている児童が他の2群にくらべて低い傾向にあった。内閣府の平成20年度版青少年白書では、働いている母親の平日帰宅時刻は、労働時間の長時間化により、平成13年と19年の比較では18時までに帰宅する人が減り、18時から20時までの間に帰宅する人が増加していると報告している[15]。また、幼児の研究では、就寝時刻は夕食時刻と関連すること[16]や、母親の就寝時刻・起床時刻の規則性と子どもの就寝時刻に関連があること[17]、子どもの就寝時刻の遅さと母親の帰宅時刻との関連があること[18]等の報告もあり、本検討の結果の背景には、就業時間が週40時間以上ある母親の児童は、母親の仕事からの帰宅時刻が遅くなることで夕食時刻が遅くなり、それに伴い就寝時刻も遅くなっていると推測できる。

食事の家族との会話は、健康や生活の規則性

表6 子どもの生活習慣で心配なこと(母親)

	全体(n=4676)			p値
	S (n=989)	Y40未満 (n=1994)	Y40以上 (n=1693)	
欠食				
はい	53(5.4)	138(6.9)	141(8.3)	0.014
いいえ	936(94.6)	1856(93.1)	1552(91.7)	
偏食				
はい	299(30.2)	657(32.9)	587(34.7)	0.062
いいえ	690(69.8)	1337(67.1)	1106(65.3)	
睡眠不足				
はい	274(27.7)	650(32.6)	539(31.8)	0.021
いいえ	715(72.3)	1344(67.4)	1154(68.2)	
運動不足				
はい	232(23.5)	421(21.1)	377(22.3)	0.332
いいえ	757(76.5)	1573(78.9)	1316(77.7)	
家族団らん				
はい	128(12.9)	298(14.9)	354(20.9)	<0.001
いいえ	861(87.1)	1696(85.1)	1339(79.1)	
肥満				
はい	137(13.9)	238(11.9)	252(14.9)	0.029
いいえ	852(86.1)	1756(88.1)	1441(85.1)	
やせ				
はい	97(9.8)	189(9.5)	167(9.9)	0.916
いいえ	892(90.2)	1805(90.5)	1526(90.1)	

人数(%)

$\chi^2$ 検定で有意差が認められた項目は調整済み標準化残差の分析を実施(■  $P<0.05$  ■  $P<0.01$ )

に関連があり[19]、食の楽しさを実感し、豊かさをもたらすことから家族で食卓を囲む機会を持つように心がけることが大切である[20]。児童生徒が回答した食事の共食状況の $\chi^2$ 検定結果は、朝食は3群間に有意差はないが、夕食では、有意差がみられた。調整済み標準化残差分析から、夕食を「家族そろって食べる」は、Y40以上群が高い結果であった。Y40未満群は、「家族そろって食べる」割合が有意に低かったが、「大人の家族の誰かと食べる」割合が有意に高かった。夕食を「ひとりで食べる」の回答は、3群間による有意差はみられなかった。

小中学生の母親を対象とした調査では、「家族みんなで食事をする」という母親は、専業主婦のほうが多い。子どもと母親の会話の量は、専業主婦およびパートと常勤の母親の間に開きがあり、常勤の母親は子どもと話す量がやや少ない。」との報告[14]があるが、母親が回答した児童生徒の食事の共食状況では、朝食、夕食ともに3群間の比較において有意差は認められず、本検討からは、母親の就業の有無や就業時間による共食状況に有意差はみられないことが示唆された。

さらに、共食状況は、児童生徒と母親の回答結果に差が生じており、「ひとりで食べている」の回答率は、3群ともに児童生徒のほうが母親に比べて高かった。これは、母親が食事をする部屋にすることで「一緒にいる」=「ひとりで食べさせてはいない」と考えるのに対し、子どもは一緒に食卓を囲んで食事をしていなければ「ひとりで食べている」と感じていると認識するのではないかと考えられる。

朝食を「必ず毎日食べる」母親は、S群90.1%、Y40未満群88.5%、Y40以上群85.8%と家事専業の母親が多く、有職の就業時間が長くなると、「ほとんど食べない」割合が高くなった。児童生徒自身の朝食摂取状況では、母親の就業の有無や時間による有意差はみられないことから、就業時間の長い母親は、子どもに対しては食事を用意し食べさせているが、自分自身は朝の時間にゆとりがなく、「ほとんど食べない」割合が他の群に比べて

高くなっているのではないかと考える。

母親の食意識では、献立を決めるときに気をつけることは、3群ともに「栄養のバランス」が高い割合を占めた。「調理の手間」は、Y40以上群で「はい」の割合が高かった。就業時間が長い母親は、帰宅時刻が遅くなる傾向にあり[17]、家事専業の母親に比べて短時間で食事の用意をすることとなるため、献立を決める際「調理の手間」を考える割合が高くなると考える。

「食品数」に関しては、小学生と母親の生活・食生活状況に関する調査で、有職である母親は、無職の母親に比べて食品の組み合わせを考えていない割合が高いとの報告[8]もあるが、本検討からは、母親の就業の有無や就業時間による有意差はみられなかった。

子どもの生活習慣で心配なこととしては、3群ともに「偏食」をあげる割合が高かった。3群間で有意差がみられた項目は、「家族団らん」であった。Y40以上群で「はい」の回答が最も高く、S群が低かった。これは、有職である母親は、就業時間が長くなるほど、家事をする時間や子どもと接する時間に制限があり、家事専業の母親に比べて「家族団らん」を意識する割合が高くなっていると考えられる。

母親自身の食意識については、就業の有無や就業時間による有意差がみられた項目があった。保護者の食生活管理に関する意識は、ライフステージ別で比較したところ、学童期の保護者の意識が有意に高いという結果[21]があるが、食意識のとらえ方は、食生活・栄養に関する関心度、食行動を行う時に働く意識、食事の際に意識することなど様々である[22]。本検討での母親の食意識は、「献立を決めるときに気をつけること」と「子どもの生活習慣等で心配なこと」の2面からの検証であった。「献立を決めるときに気をつけること」では、「料理の手間」の簡便性に関する項目で差がみられたのは、母親の家事に費やす時間が影響することが予想される。

また、就業時間が長い母親は、夕食を家族そろって食べる割合が高く、家族団らんを心配している

割合も高いことから、食事をする環境やコミュニケーションを意識しているのではないかと考えられる。

母親の食生活に関する意識と母子のコミュニケーションに関する研究では、母子のコミュニケーション頻度が高いほど、母親自身の食意識が高く、親子が共有する食事時間を楽しいものにし、子どもの食への興味を高めているという報告[23]や、子どもの食事に対する意識・態度は、母親が食事に対して積極的な態度をとり、食生活の中で子どもに接し、コミュニケーションをとることで違ってくるとい報告[5]がある。今後、母親の食意識に関しては、子どもとのコミュニケーションを積極的に図っているか、子どもに対する食教育に関する意識などの、食行動に働く意識について就業状況による違いを検証する必要性を感じた。

以上のことから、母親の就業の有無および就業時間における比較を行ったが、本検討からは、母親自身の食意識には3群間で違いが生じたものの、母親の就業が児童生徒の生活習慣・食意識へ与える影響は少ないことが示唆された。

### まとめ

全国47都道府県の公立学校の小学校5年生、中学校2年生及びその保護者4,676組を対象に、母親の就業の有無及び就業時間によって「家事専業」「有職週40時間未満」「有職週40時間以上」の3群に分け、児童生徒の生活習慣・食意識等に違いがあるか、また、母親自身の食意識等への影響があるのか検証を行った。その結果、児童生徒の生活習慣、食意識には3群間に有意な差がないことが明らかになった。母親自身の食意識には母親の就業の有無や就業時間による差が生じたが、児童生徒へ与える影響は少ないことが示唆された。

### <参考文献>

- [1] 食育基本法 2005
- [2] 内閣府：平成18年度版食育白書 食育推進にいたる背景と取組の本格化 .2006; pp2-18.
- [3](独)日本スポーツ振興センター：平成17年度児童生徒の食生活等実態調査 .2005,pp14
- [4](独)日本スポーツ振興センター：平成19年度児童生徒の食事状況調査 .2007,pp229
- [5] 伊藤至乃、天野幸子、殿塚婦美子：食生活における母子のかかりについての研究、栄養学雑誌 .1993;51:39-52.
- [6] 春木敏、原田昭子、山口静枝：食行動にみる食意識の構造分析(第2報) - 母親の食行動パターンと就学前幼児の食物摂取状況 -、栄養学雑誌 .1993;51:317-327.
- [7] 富岡文枝：幼児への食教育と両親の食意識及び食行動との関わり、栄養学雑誌 .1999; 57:25-36.
- [8] 佐久間章子、前大道教子、小田光子、岸田典子：小学校1年生と6年生およびその母親の健康状態、体型、生活・食生活状況との関連、日本公衛誌 2004 ; 51 : 483-495.
- [9] 新行内美穂、石岡和広、上地勝、上濱龍也、田神一美、細川淳一：保護者のライフスタイルとその子の健康行動との関連について、学校保健研究 .1997;39:355-363.
- [10] 中村伸枝、遠藤数江、荒木暁子、小川純子、佐藤奈保、金丸友：幼児と母親の生活習慣の実態と母親の健康に関する認識 千葉大学看護学部紀要 .2008; 第30号 :25-29.
- [11] 中央教育審議会：食に関する指導体制の整備について(答申) .2004 ; 第1章 . 1
- [12] 厚生労働省：平成20年版働く女性の実情 .2008.
- [13] 厚生労働省大臣官房統計情報部：第6回21世紀出生児横断調査結果の概況、母の就業状況
- [14] ベネッセ教育研究開発センター：第3回子育て生活基本調査報告書 .2008;pp34-37.
- [15] 内閣府：平成20年度版青少年白書 特集「家庭、地域の変容と子どもへの影響」2009; 55-56
- [16] 山口蒼生子、金子俊、大江秀夫、大谷八峯、後藤玲子、二見大介、山崎文雄、藤沢良知：保育園児(3~6歳児)にみる生活時間の变化、小児保健研究 1994;471-478
- [17] 矢野香代、大浜敬子、産田真代：母と子における睡眠行動の関連性と課題 川崎医療福祉学会誌 2007;17:175-183.
- [18] 服部伸一、足立正：幼児の就寝時刻と両親の帰宅時刻並びに降園後のテレビ・ビデオ視聴時間との関連性、小児保健研究 .2006;507-512.
- [19] 岸田典子、上村芳枝：学童の食事中における会話の有無と健康及び食生活の関連、栄養学雑誌 .1993;51:23-30
- [20] 内閣府：食育基本計画、第1食育の推進に関する施策についての基本的な方針 . 2006
- [21] 塚原康代：保護者の食意識と子どもの食生活・身体状況 - ライフステージ別相違点と相互関係 -、栄養学雑誌 .2003;61:223-233.
- [22] 原田昭子、春木敏、山口静枝：食行動にみる食意識の構造分析(第3報) - 食行動パターンと食意識 -、栄養学雑誌 .1998;56:71-80
- [23] 高畑彩友美、富田圭子、饗庭照美、大谷貴美子：母親の食生活に対する意識や生活充実感が幼稚園に通う子どもとのコミュニケーション頻度に与える影響、日本家政学誌 . 2006;57:287-299.

(受理日:2011年12月21日、採択日:2012年2月8日)